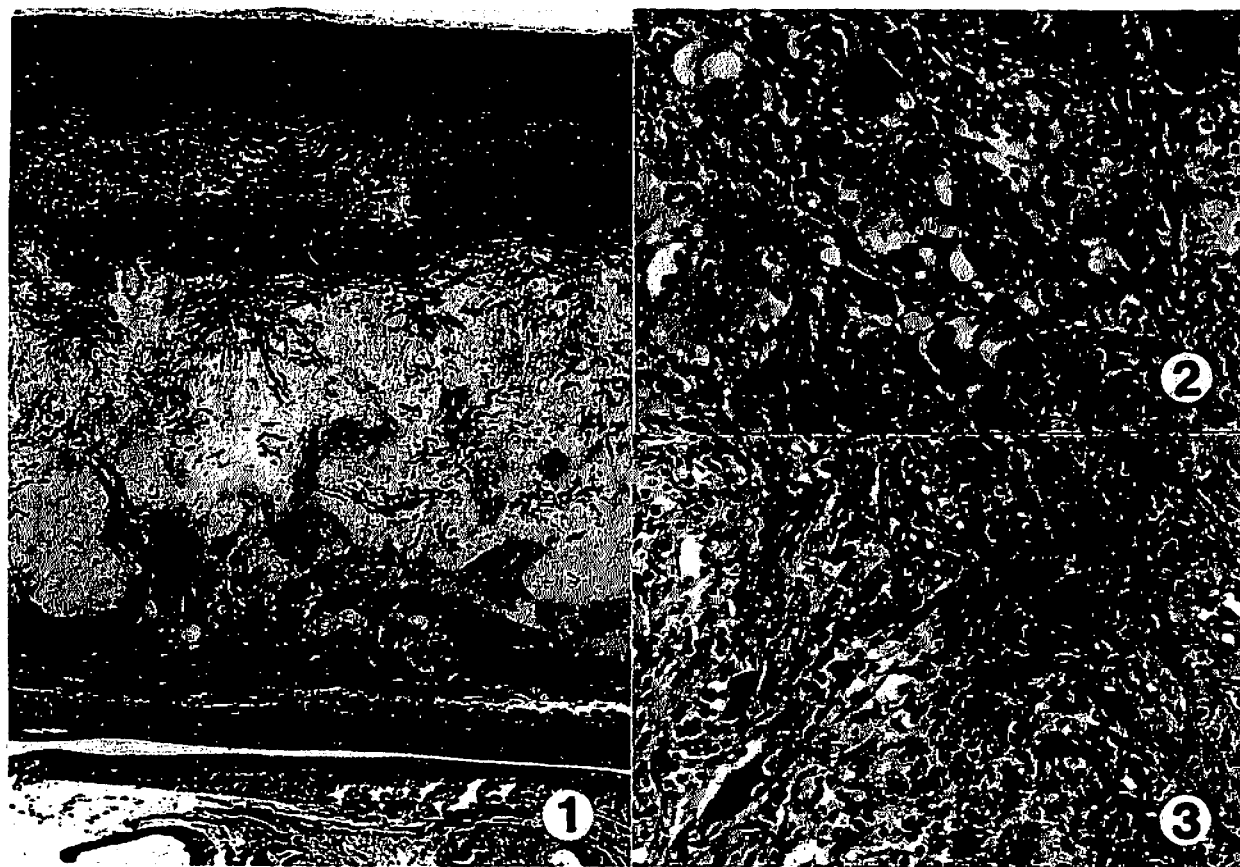


# 豚の巨細胞性肉芽腫性大動脈炎

麻布大学獣医学部病理学第1講座出題 第26回獣医病理学研修会標本No.458



動物：豚，L.W.D.交雑種，雌，約7ヶ月齢，肥育豚。

臨床所見：軽度の削瘦のほかは不詳。

肉眼所見：病変は大動脈，腕頭動脈，左鎖骨下動脈，冠状動脈，肺動脈とその分枝で全周性に，頸動脈，前大静脈，肺静脈では，結節性にみられた。いずれの血管においても壁の肥厚が著しく，切片上でも，大動脈壁は厚さ約4mm，肺動脈幹は約7mmに達していた。

大動脈の内膜は一見平滑であったが，微細硬化部が点在し，肺動脈幹では，大・小の黄白色，丘状の結節が隆起し，一部癒合，盤状となっていた，これらの血管のほか，両心房，気管，気管支，肺胸膜にも病変を認めた。とくに，左心房は，全体に硬化し，心内膜の黄白色，瀰漫性肥厚がみられた。なお，各臓器から細菌は分離されなかった。

組織所見：各組織にみられた変化は，軽重の差はあるが，基本的には，同質であったので，研修会に提出した大動脈の所見を述べる。大動脈では，全周性の中膜肥厚と外膜の線維化が著しいが，内膜と中膜内層は，よく保持されていた。中膜外層～中層及び外膜には，おびただしい数の類上皮細胞や多くの異物巨細胞より成る肉芽腫

性炎が存在し，中膜弾力線維層を内腔に向かって，虫喰い状に，侵蝕していた（Fig.1）。病巣内あるいは隣接する弾力線維は，膨化，好酸性を増し，時に淡青色を呈しており，これら弾力線維を食喰する多数の巨細胞を認めた（Fig.2，矢印は弾力線維）。肉芽腫病巣に混じて，小膿瘍や好酸球の集簇を散見した。

内膜にも，ときに，内弾性板に一致する小肉芽腫形成がみられた。なお，各病変の切片に，チールネルゼン染色，グラム染色等を実施したが，病原体は確認できなかった。

以上の所見より，研修会提出標本を巨細胞性肉芽腫性大動脈炎と診断した。しかし，本例は，系統的に全身の血管とくに幹動脈が侵されていることから，巨細胞性肉芽腫性幹動脈炎と診断できると考えた。また，本例は，弾力線維が密に分布する組織に，病変が存在し，弾力線維を中心に肉芽腫の形成がみられることから，病理発生に，弾力線維の変性が深く関わっていると考えられた。

Fig.1，大動脈（上端は内膜，下端は外膜）

Elastica, Van Gieson 染色

Fig.2,3，大動脈，H,E染色